

【創刊の辞】

一橋大学附属図書館の将来像を探る

—研究開発室開設の意義—

一橋大学附属図書館長・研究開発室長

江夏 由樹

2012年4月、一橋大学附属図書館に研究開発室が設けられた。研究開発室は附属図書館長を室長、附属図書館及び社会科学古典資料センター所属の専門助手4名を室員とし、図書館の事務を担当する学術・図書部から学術情報課長が参加する組織体制である。その任務は図書館機能の強化を目指す様々な調査研究を進めることであり、そこには、図書館の中長期戦略を策定するという重要な役割が含まれている。学術情報基盤の電子化への対応をはじめとして、現在、大学図書館が直面する課題は数多い。そうした課題と向きあっていくことは、大学図書館の新たな役割、つまり、これまでとはかなり異なる大学図書館像を模索していくという作業にもなってくる。

一橋大学附属図書館の特長の一つは、名実ともに大学の「中央図書館」であるという点にある。他の大規模な国立大学等においては、各研究科・研究所がそれぞれに図書館・図書室を備えており、中央図書館は学内の各図書館・図書室の間の連絡調整、また、学部学生のための学習図書館としての機能を主として果たしている。これに対し、本学では、経済研究所の資料室や社会科学統計情報研究センター、国際企業戦略研究科図書室、そして社会科学古典資料センターの存在を忘れてはならないものの、附属図書館が文字通り「中央図書館」としての役割を担っている。つまり、一橋大学では、附属図書館が学術情報基盤の整備という任務を一手に引き受けているといえよう。それゆえ、本学図書館はまず「研究図書館」としての性格を色濃く有している。

学術情報基盤の電子化に伴い、図書館の形態・機能は大きく変わりつつある。電子ジャーナルの普及、その価格高騰が進むなかで、大学図書館が所蔵する学術資料の質と量をどのように維持・発展させていくかという点は難しい問題となっている。すでに自然科学系の分野においては、研究成果の多くは電子媒体によって発信されているが、人文・社会科学系においてもその動きは徐々に進みつつある。一橋大学の場合でも、各研究領域によってジャーナル等の電子化の状況が異なるため、図書館が購入する電子媒体と冊子体の資料

との間にどのようなバランスをとっていくかという問題は厄介である。さらに、電子ジャーナルの導入により、研究者・学生は必ずしも図書館に来る必要がないという状況が生まれつつある。つまり、電子化の波は研究者・学生の研究・勉学のスタイルをも変えつつあると言えよう。

そうした状況のなかで、現在、図書館は少なくとも次の4つの課題に向かい合っている。第一に、図書館と各研究科・研究所等との連携を強化し、第一線で活躍する研究者の必要とする図書・雑誌・データベース等の資料を効率よく、迅速に蒐集・整理・公開する体制の構築である。これは、「研究図書館」としての機能を一層向上させていく試みの一端である。そのためには、研究現場との橋渡しとなる「リエゾン・ライブラリアン」制度の導入などが課題となる。

第二に、図書館が大学における研究成果の発信基地の一つとなることである。すでに本学での機関リポジトリの整備は本格的に進んでおり、その評価も高い。今後は、機関リポジトリの一層の整備とともに、本学教員の最新の研究成果、例えば、各研究プロジェクトのワーキング・ペーパーなどを電子出版というかたちで迅速に続々と公表できる仕組みを考えていくことが必要である。

第三に、文書館的機能の強化である。これまでも、大学図書館は図書・雑誌等を対象とするだけでなく、「文書」の蒐集・整理・公開にも携わってきた。実際、多くの大学図書館は大学史資料の収蔵・整理・公開、つまり、「学園史編纂」事業に直接・間接に関わっている。また、大学の法人文書を歴史文書として残すため、大学に文書館を設置し、「国立公文書館等」の一つに指定される動きも顕著となってきた。こうしたなかで、一橋大学においても文書館・大学史資料室等の設置・拡充を目指していくならば、そこで、図書館がどのような役割を果たしていくかという課題が浮かびあがってくる。

第四に、学習図書館の整備である。本学の附属図書館は「研究図書館」としての性格が強いことから、「学習図書館」としての機能は必ずしも十分ではなかった。近年、全国の大学図書館において、学生への学習支援の一環として、ラーニング・コモンズ等の設置が進んでいる。本学図書館においても、「研究図書館」としての機能を損なうことなく、ラーニング・コモンズをはじめとする学生への学習支援事業を一層展開することは重要な課題となっている。

限られた人員・予算・スペースのなかで、上記の課題を解決していくことは決して容易ではない。しかし、そうした問題に取り組む図書館内部の中核的な、そして、横断的な組

織として研究開発室が設けられたことの意義は大きい。この「一橋大学附属図書館研究開発室年報」の刊行は、附属図書館の毎年の活動記録、また、図書館の更なる発展を目指す議論の発表の場として、重要な役割を果たしていくことであろう。